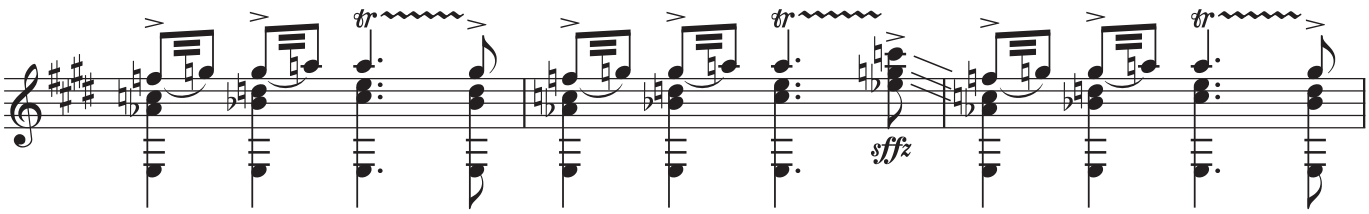
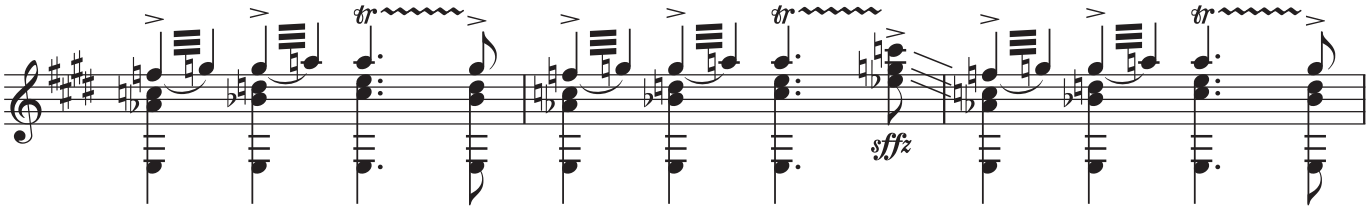
連符の技巧　その２



上の譜面はビラ＝ロボス作曲の「ギターの為の練習曲第７番」の一部で、小節冒頭の奇妙な連桁が今回のテーマです。これはトレモロの簡略表記と呼ばれるものですが、ここではＦとＧ音、次のＧ音とＡ音の、それぞれ２音を急速に繰り返して弾くことを意味します。

Finale でこれを作るとなると、普通に８分音符を入力して、そして図形作成でも使って中の２つの横線を入れる方法等が浮かんできますが、もっと正確に出来ることで良く知られた方法があります。中の２つの横線の太さは連桁と同じにすべきものなので、ここでも前回と同じく連符ツールを用いて、「32 分音符２個を４分音符１個分に入れる」として、数字と括弧を非表示にすれば OK です。そして道具箱ツールの「連桁伸縮」で 16 分音符と 32 分音符の２つをチェックしてから両端を縮めれば、このような形に出来ます。８分音符のように見えるＦ音、Ｇ音、Ａ音は Finale 上では 32 分音符というわけです。

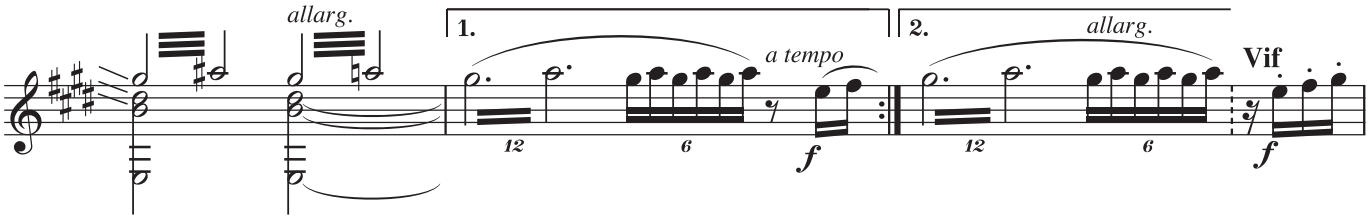
ただし、このショット社版に準拠した記譜法は必ずしも一般的ではなく、次に示すように８分音符連桁も一緒に縮めて３本の浮遊した横線にする様式の方が好まれるようです。そうすると今度は各音が４分音符のようにも見えてきますが、Finale での音符入力と連符ツールの扱い方等は変わりません。「連桁伸縮」で最初に出てくる８分音符のチェックもそのままにしておけば、全部一緒に動いてくれます。この形の方が多くの音楽家に馴染み深いものでしょう。以上の操作を全て自動で実行してくれる TG ツールの「簡易トレモロ」というプラグインが Finale に装備されていますが、それを使った場合に出てくるのは、こちらの浮遊３本線の方です。



この曲には下の譜面に示した部分もあります。今度は２分音符のように見えますが、やはり Finale 上では「32 分音符２個を２分音符１個分に入れる」ことになります。もう一手間必要になり、道具箱ツールの「符頭変更」を使って 32 分音符の符頭を２分音符のものに変えなければなりませんが、原理は同じです。

不可解なのは反復括弧の中の付点２分音符と連符を表す 12 という数字の関係です。ここでは 16 分音符連桁が用いられており、付点を表示させるためには「付点 16 分音符２個を２分音符１個分に入れる」としなければなりませんが、この奇妙な付点があると５拍子になってしまうようにも思えます。

実はこれにも理があり、３連符や６連符、そしてここに有る 12 連符などで演奏法を規定する場合は、あたかも複合拍子のように簡略表記の音符に付点を付ける伝統があるそうです。これも今では好まれるものではなさそうですが、ショット版のこの楽譜はその伝統に倣ったものと言えそうです。



ところで、この曲の２音トレモロを 32 分音符で演奏するのは、テンポから考えて不可能に近いです。まあ適当にやるしかなかろうと思っていましたが、ごく最近になって、やっと明快な解答を得ることが出来ました。トレモロの簡略表記に 32 分音連桁が用いられる場合は、「出来るだけ早く」みたいな感じで、演奏者に解釈を任せられることが多く、対して 16 分音連桁や連符表記が用いられる場合は、明確に反復回数が規定されるものとか。これで全ての疑問が氷解しましたが、実は今年になって手に入れた本で学んだものです。それは 2011 年 Faber Music 社初版の "Behind Bars"(小節の背後、または鉄格子の背後、つまり刑務所の中？）という洒脱な題名の、非常に分厚い楽譜浄書解説書です。著者の Elaine Gould という方は 1987 年から同社に勤務する御婦人だそうですが、いやはや、実に大した編集者です。

2011 年 10 月 梅本雅弘